日本声楽発声学会

学会通信

第5号

会員の皆さまへ

理事長 米山文明

学会通信第５号をお届けいたします。
前号発行以後学会誌３１号が５月に発行されましたので、それ以後の経過報告になります。

（1）平成１５年５月の第７７回例会の詳細な内容は、学会誌３２号（平成１６年５月）に載りますので、簡単に印象を述べます。

〔研究発表〕①「更年期が声に及ぼす影響」は、更年期の臨床面について、河合会員と米山が発表しました。該当する年齢層の女性へのアンケート集計がおもな内容でした。まだ手をつけたばかりで質、量ともに今後の追加研究が望まれます。

②「テノール歌手になるために克服しなければならない諸課題について」上原隆二会員が自己体験を中心にした歌唱技術面の研究でした。これも今後の課題をいくつか残しました。

③「息の流れの方向と共鳴についての実践的考察」を和田みのり会員が発表されました。共鳴の分野はこれまで最も研究が遅れていましたが、具体的教育面から生徒さんをモデルにして、独特に工夫考案された指導法はユニークなものでした。実践面ではとかく自分の方式公開を望まれない傾向のある技術指導を、あえて公表された勇気に敬意を表します。このような個人的に独自の研究が多くなることが本学会にもふさわしく、発声の研究がますます活性化されると思います。

〔特別講演〕の今藤文子先生には長唄を中心とした邦楽の発声について話していただきました。これも学会誌３２号に詳述しますが、現在話題になっています「文科省指導要領」の邦楽導入の議論をふまえて企画しました。斯道名門の家に生まれ、幼少期からきびしい特殊教育を受けられた名手の思いもかけない人間味とユーモアに接して、会員一同感動しました。三味線の持ち方から楽器の値段まで披露され、邦楽に対する基礎知識修得に役立ちました。

〔現役声楽家〕のコーナーは、直前になって予定の鮫島有美子さんのキャンセルで混乱しましたが、代わりに緊急にお願いした平松英子先生が予定の仕事をやりくりして快諾され、助かりました。この内容も学会誌で報告しますが、すばらしいマーラーの演奏でした。ご自身のライフワークとも思えるソプラノ歌手による世界初の「マーラー全集」の完成が大いに期待されます。日本で久しぶりに出現した本格的リート歌手を感じました。生徒さんを指導する教育姿勢にも彼女の資質の高さが十分示され、有意義なコーナーでした。

（2）８月の研修会は昨年につづき東京の日本福音ルーテル教会で２日間行われました。これも学会誌の報告にゆずり、要点のみ述べます。

[A]８月１８日の午前は、パネルディスカッション「欧米各国における学校音楽教育の現状」が行われました。アメリカ、イタリア、イギリス、ドイツ、ハンガリーの事情をそれぞれのパネリストにより報告があったほか、フランスの事情を米山が、文科省からの出向者、岩本わたる氏（ユネスコ）、蝦名喜之氏（パリ日本大使館）、在仏邦人諸氏から集めた資料を中心に報告しました。ドイツについてはウーヴェ・ハイルマン氏が飛行機のトラブルで遅れ、不参加でした。司会補助を小川昌文助教授、発言者を佐々木正利教授にお願いしました。詳細は学会誌にゆずりますが、各国の事情はかなり異なり、それな

りにたいへん興味深いディスカッションでした。パネラー同士の討論、フロアからの意見など、大きな収穫でした。次回はアジア諸国（中国、韓国その他）のパネルを行うことを９月理事会で決めました。会員諸氏の参加、発言を大いに期待します。

[B]合唱講座「のびやかに歌う…グレゴリオ聖歌をテキストに」は、片山みゆき先生がアマチュア合唱団の指導に必要な基礎的発声法について、極めて実践的でユニークな方法で指導されました。具体的な独自の工夫が組み込まれ、たいへん分かりやすく有益な講座でした。

[C]「声の呼吸法」と「雑学タイム」は、会場の終演時間のカットや参加人数と会場の広さの把握の遅れ、さらに内容も断片的、不統一になってしまった点など、あわせて参加の皆様に深くお詫びいたします。

[D][E]８月１９日（午前、午後）にウーヴェ・ハイルマン先生の公開レッスンがありました。午前から午後へと終日にわたるすばらしいものでした。実際に受講、聴講された方でないとその良さは分かりませんが、強烈ですさまじい気迫と、懇切丁寧で優しさと温情にあふれた指導ぶりでした。歌唱に最も必要な基礎となる発音、声づくり、共鳴、呼吸、姿勢などの要点を的確におさえた指導でしかも女声の歌まで自分で歌って示しました。ある会員は私に「最後は涙が出るほどすばらしいレッスンでした」と帰り際に言い残して行きました。ハイルマン氏自身もまた私に「こんなに熱心で真剣に聴いてくれる聴衆を初めて経験した」と言いました。まさに以心伝心でしょうか。

本学会誌も対外的資料提供の意味もあり、次号から研究発表、特別講演などに英文Titleと、英文Keywordをつけます。

学会発展のため皆様のいっそうのご支援、ご協力をお願いいたします。

◆夏季研修会聴講記◆

百聞は一見にしかず

（ハイルマン先生公開レッスンレポート）

理事 河合孝夫

８月１９日、夏季研修会２日目は午前１０時から午後５時までウーヴェ・ハイルマン先生の公開レッスンが行われた。昨年の例会での特別講演が大好評で、ぜひもう一度という会員の声に応えたものであった。

公開レッスンという形は、教師が初めて会う生徒を指導し、かつ多くの聴衆に対する配慮も合わせ考え進めねばならず、これまでのいろいろな例をみても形式的になってしまうことが多い。しかし、この日の公開レッスンは、それらとひと味もふた味も違うものだった。

この日のハイルマン先生のレッスンは、世界で活躍する現役声楽家が、同様に世界で活躍する声楽家を育てたいという溢れんばかりの情熱をエネルギーとして生徒を指導する、本場のヨーロッパでも稀な迫真のレッスンであった。それはレッスンの内容が、現役の声楽家ならではの実践的な指導であることで、より際立つものになっていたと思う。それらのいくつかをご報告することで、この日のレッスンのすばらしさをお伝えできればとレポートを書くことにした。

先生のレッスンの全体は、生徒が実際にステージで演奏することを想定した上で、立ち方、位置、ピアノの伴奏の仕方はもとよりその置き方までに言及された。生徒の傍にいたかと思うと、あるときは会場の奥で聴き、右に左に自由に移動しながら声を聴いて指導される先生の動きを見るだけでも、演奏とはどういうものであるかを考えさせられたのは私だけではあるまい。

生徒へのレッスンは、分かりやすい日本語でなされ、世界一流の演奏現場で身につけた音楽と技術をやさしく、しかも妥協しない態度で粘

り強く教えられる姿に感動した聴衆は数多くいた。そこで授けられた声楽技術は、論理的基礎を持ち、あわせて実際に歌手が歌うときに、より音楽的に聞こえるよう柔軟な感覚で指導されていた。

しかし、特筆すべきは何と言ってもその声である。世界屈指の歌手であるその声が先生の心に感じる思いの全てを表現していた。我々は、どのように音楽を解釈し、どのように身体と喉を使って歌えばよいのかを、目で見るかのように思い描くことができた。「百聞は一見にしかず」の思いを抱きながら、まるでコンサート会場にいるかのような気分で一日を終えたのであった。

次に、この日の公開レッスンを聴講された方から寄せられた感想をご紹介する。

・熱心なお姿に感動した。舌の形を教えていただいたのを参考に鏡を見ながら練習してみた。ハミングの仕方も練習したが、難しかった。最高音のとき歯を見せて歌うのは、私の想像していた仕方を確認できた。　（松田紀子）
・舌をスプーンを使って確認したのを興味深く感じた。日本人とハイルマン先生の骨格の違いを感じた。熱心に教える姿に感動した。
（原かほる）―上記２名の方はプライベートレッスンを聴いての感想。
・発声で今まで漠然としていたことを、具体的に声に出してくださり、目から鱗の感がした。
・いろいろなレッスンを見ることで、さまざまな発声を客観的に学ぶことができた。
・殊にマスクで歌うことに関しては、具体的に声を出してくださったので生徒の変わる様子がよく分かった。
・まさに百聞は一見にしかずの感があった。

最後に、声楽家として最も大切な声を惜しげなく使い、公開レッスンを成功に導いてくださったハイルマン先生にあらためて感謝を申しあげ筆を擱く。

ハイルマン先生は情熱の人

理事 末　芳枝

エネルギーの全てを歌と指導に注ぎこみ、歌って歌って汗まみれになって指導される姿勢に、まず感動した。

流暢な日本語で、一人ひとりにたくさんの知識とテクニックを説明し、歌いながら実践と結びつけていく。暖かく、やさしく、しかも真剣そのものの指導に感動しない人はいない。

ヨーロッパでのたくさんの舞台経験は、優れた歌手たちとの共演であり、超一流の指揮者の下での芸術修業の貴重な場であったことを、お話の中でうかがえた。レパートリーもたいへん広く、優れたテクニックを適切な判断のもとに歌いながら与えていく指導は、すばらしい。

高い芸術性と優れた指導性、そして純粋なまでのお人柄、こうした芸術家が日本の声楽家のためにご尽力下さることを大変うれしく思う。

◎２００３年芸研連に出席して

副理事長 丹羽勝海

２００３年度日本学術会議芸術学研究連絡会議は、６月２８日（土）２９日（日）の２日間、京都立命館大学以学館２号ホールで開催された。

表象芸術２００３―アジアの歌と舞い―

２８日パフォーマンス

第１部「歌舞伎４００年」

第２部「表象芸術としての現代舞踊」

第３部「京都と日本、そしてアジアへ」

２９日シンポジウム

記念講演「四条河原の歴史的環境」

立命館大学教授 川嶋将生

１、東洋的身体論（美学会）

広島大学助教授 樋口　聡

２、風俗画に見る歌舞伎（美術史学会）

同志社大学教授 岸　文和

3、歌舞伎と装い（服飾美学会）

お茶の水女子大学名誉教授 小池三枝

4、舞踊と音楽（東洋音楽学会）

大阪大学名誉教授 山口　修

5、舞踊表現と東西（舞踊学会）

京都市立芸術大学 吉川周平

6、舞踊における身体づかいの東西

（比較舞踊学会）

お茶の水女子大学名誉教授 森下はるみ

以上のプログラムで２日間大盛況の内に行われた。

今年は歌舞伎４００年の記念すべき年で、日本の若衆歌舞伎、阿国踊り、阿国歌舞伎の源流、上方舞、現代創作舞踊等に加え、インドネシアの歌舞、中国の歌舞、韓国の歌舞（パンソリと伝統舞踊）の国際的な発表者も多数参加して全日空ホテルで２８日夜行われたパーティもたいへん華やかなものであった。

また２９日のシンポジウムも立命館大学２１世紀 COE プログラム「京都アート・エンタテイメント創成研究」のバックアップを得て、コンピュータを駆使した映像や音響による発表に未来の芸術研究に大きな希望をいだかせるものであった。

芸研連の会議および２日間にわたったパフォーマンス、パーティ、シンポジウムに出席して大きな収穫を得ることができた。

……◇……◇……◇……

【Q&A】

声種選択について

私たち音声臨床医外来に「私の声種は何でしょうか」という質問を持ってくる歌手（主に学生）が時々あります。実際には医師だけで決められるものではありませんが、声帯の形態（長さや太さ）だけ見て声種を決められると思って来られるようです。声種選定の目安として私はだいたい次の点を参考にします。

①生理的声域（音楽的声域ではなく）：生理的に発声可能の限界を調べます。必要な高音が出せなければソプラノの歌は歌えませんし、低音が出なければアルトの歌が歌えないのは当然です。声域の高低いずれをも出し得る場合は、音楽的評価で決めるようにすすめます。それには有能な声楽教師の助言が必要です。

②声区の変換点：変換点から高音域の範囲と低音域の範囲のどちらが広範囲に使えるかを調べます。使える範囲が広い方の声種を選ぶ方が有利だからです。

③音質（音色）：同じ声域の中でも音色が明るいか暗いか、重いか軽いか、など音色の因子によって声種を決める参考にします（かなり主観的要素が入りますし、これにも音楽教師の評価が優先します）。

④声帯の長さと重さ：一般に声帯の長さ、重さは低音域の可能性を推測するための指針になり得ます（重さは視診上太さから推測するしかありませんが）。ところが高音域の声は声帯の長さ、重さとは無関係に出し得ます（発声技術の巧拙如何で）。したがって私たちは歌手の声帯が短い人、軽そうな人が低音域の声種を選んでいる場合のみ、警告することができます（音声障害をおこす可能性があるからです）。逆の場合、すなわち声帯が長い人、重そうな人がソプラノ領域を歌っている場合は注意しません。発声技術さえできれば高音は出し得るからです。

⑤声道の長さ：声道（口唇から声帯の付着位置までの距離）が長ければ声帯の形と無関係にある程度の低音は出すことができます。

⑥声種決定の必要度：元来声種分類の必要性はポリフォニー音楽の発達やグランドオペラの誕生など、近代の社会情勢や新しい音楽形式などの影響を受けて生まれたものです。したがって、合唱やオペラで声部を分けたり、キャラクターを決めるときには必要でしょうが、単独で

歌う場合には声種は何であってもよいはずです。

日本の声楽志望者の中には特に声種にこだわる傾向が強く、どちらか声種を決めないと納得しない人が多いようです。理由の一つとして個人的私見ですが、大学入試の願書提出時に声種決定を義務づけているところがあることです。特定大学のみですが、受験生全体に大きな影響力を持つ大学ですと、当人およびその指導者の困惑は大きいはずです。もう一つは子どもから大人までの学校、アマチュアをまきこんだコーラスブームの影響もありそうですが、これはかなり変動可能要因を持っていますから、さほど深刻ではないでしょう。

こんな理由で医師に相談に来るのでしょうが,冒頭に述べたようにこれは医師の決めるべきものではなく、参考意見として言うべきことです。明らかに不適当な選択、たとえば短く、軽い声帯を持つ人が、高音が出ないという理由だけで低声種で歌っているような場合は音声障害をおこす危険があることを忠告する必要はあります。

声種の固定に強くこだわらず、その年齢的な時期と歌唱技術に適した選択をしながら、流動的に対応していくのが賢明だと思うのですが。

(F.Y)

◆米国声楽指導者会議冬季研修会◆

２００４年1月８日～１０日
フロリダ国際大学音楽学部
〈声のための新しい音楽～伝統と試み〉

・公開レッスン　フィリス・ブライアン・ジャルソン
　ジョーン・ラ・バーバラ
・リサイタル　キャロル・ラインズ
　ジョイス・アンドリュース
　リー・トンプソン
　リンダ・リスター
　スーザン・ケイン
　スティヴン・ハーロス

ほか講義、デモンストレーションなど多数。

・参加費　１１月末まで　＄165
　１２月から　＄180
・宿泊費　参加者割引で　＄100程度
　終了後、マイアミ周辺観光旅行
　詳細、登録は、www. nats. org

◆米国声楽指導者会議コンクール◆

・本選　2004年7月10日ニュー・オリーンズ
・最終予選　9日
・地区予選　各地区おいて、2、3、4月
・申込締切　2003年12月1日
・資格　2003年12月1日時点で、２１歳から３５歳まで。
・登録費　＄35
・優勝賞金　＄5,000　第2位　＄4,000
・ニューヨークリサイタル補助金　＄2,500
・課題曲１、オペラ・アリア　１曲
　２、オラトリオ、ミサ曲など　１曲
　３、歌曲　１６曲
　a、１８世紀以前のもの２曲
　b、ドイツ・リートまたはフランス・メロディ
　c、b以外で英語を除くスペイン、東欧諸国、北欧諸国などの歌曲。
　d、米国、カナダ、英国など英語の歌曲３曲以上。１９５０年以降の作品１曲を必ず含む。
　詳細は、www. nats. org

◎第７８回１１月例会のお知らせ

１１月例会を下記により開催いたします。会員の皆さまはもとよりお知り合いの方や生徒さんをお誘いの上、ご出席ください。

1、と　き　１１月３０日（日）
　９：５０～１６：４５
2、ところ　東京芸術大学音楽学部

3、プログラム

A, 研究発表　山田　実　稲垣政春
鹿児島達也

B, 公開レッスンとお話
エディット・ゼーリッヒ・パペ

C, 現役声楽家の演奏と公開レッスン
ソプラノ　松本美和子

D, フリートーキング

〔会員だより〕　◆演奏会◆

◇　東京室内歌劇場コンサート
〈秋の日にうたう〉
・と　き　10月30日（木）　開演18:30
・ところ　横浜市開港記念会館
・チケット　3,500円

◇　渡辺高之助先生追悼
ぐるーぷ・なーべ 第６４回演奏会
〈シューベルトの名曲を集めて〉
・と　き　12月19日（金）　開演19:00
・ところ　東京文化会館小ホール
・チケット　3,000円

◇　ドイツ・バッハゾリステン演奏会
指揮 ヘルムート・ヴィンシャーマン
合唱指揮　佐々木正利
・と　き　12月5日（金）　開演18:30
・ところ　東京オペラシティコンサートホール
・曲　目　J.S.バッハ「マタイ受難曲」
・演　奏
ソロ〈福音史家〉T.ニルス・ギーゼッケ
〈イエス〉B.三原　剛（バリトン）
S.イングリッド・シュミットヒューゼン
A.マルティン・ヴェルフェル
（カウンター・テナー）
T.五郎部俊朗　B.小松英典（バリトン）
合唱　盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
TOKYO FM少年合唱団
・チケット　S：7,000円　A：5,000円

ヴィンシャーマン指揮のバッハゾリステンと佐々木正利理事指揮の合唱団による「マタイ受難曲」の公演。盛岡バッハ・カンタータ・フェラインは、佐々木氏の指導の下でバッハゾリステン、ニュルンベルク交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー等との共演、パリ・ユネスコの招待演奏などドイツ本国はじめヨーロッパ各地で高い評価を得て活動をしている合唱団です。

◆CD制作とリサイタル◆

会員池田京子さんの「池田京子シュトルツ花の歌」というタイトルのCDアルバムのご紹介。花にかかわるドイツ歌曲を選び、表題のシュトルツのほかシューマン、シューベルト、マーラー他の曲を表情豊かに歌われております。ピアノは平島誠也氏。ヤマハ、山野ほか全国レコード店にて発売中。また、１０月１８日のリサイタル（第一生命ホール）は大成功でした。
ラッツパック・レコード（03-3470-2179）　定価3,000円

〔事務局より〕
◎学会誌３２号掲載の原稿募集中！「研究発表規定」によりお申し込みください。締め切りは平成１６年１月末日ですが、できれば１２月中に事務局までお送りください。
◎会員の皆さまからの「学会通信」への投稿をお待ちしております（誌上での匿名可）。第６号の原稿締め切りは１６年１月末日、事務局必着です。近況報告（演奏会、研究会etc.）や出版、CD制作等、日ごろの活動の様子などお寄せください。　（事務局長　川上勝功）

学会通信　第５号
平成１５年１０月２３日発行
日本声楽発声学会事務局
〒275-0005 習志野市新栄２－９－２　西村暁子方
TEL/FAX. 047-479-5701